
フェイト ～真祖狩り～

紅孕貴夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェイト ～真祖狩り～

【Nコード】

N9700E

【作者名】

紅孕貴夜

【あらすじ】

国からの命を受けたツアイヴェルが依頼を遂行していく過程での心の成長を描きました。

ツァイヴェル（前書き）

これはまったくのオリジナルです。絶対にパクリは禁止です。

ツアイヴェル

「いゝいゝいゝん！」

メキメキと悲鳴をあげる頭蓋骨。

頭を掴まれ、中ずり状態にされている為、全体重を首で支えなければならぬ。かなりの苦痛だ。

「く、くそ！何時まで寝てるんだハーシエル！」

このままじゃ、マジでやばい。

話の開始直後に、主人公がいきなり頭蓋骨を力チ割られて死ぬなんて、洒落にならん。

つと、自己紹介がまだだったな。

俺の名前はツアイベル。

冒険者だ！

今は、お偉いさんの依頼で町の調査に来てるんだが、知らない男にいきなり頭を掴まれた。ってわけさ。

そして、こいつ…、といつても剣なんだが。こいつはハーシエル。

俺の相棒だ。昔、冒険中に見つけた人の言葉を持つ剣だ。

今は、まあ、寝てるみたいで反応が無いんだけど…。

「つつ！と、こんな事をしている場合じゃなかった…」

頭を掴む指を解こうにもびくともしない。

「つくそ！放せ！！」

男の腹に蹴を入れるがびくともしない。

男の指がぬいぬい俺の頭を締めあげる。

「いゝいゝん！」

くそ、仕方ない！

「悪く思っなよ！」

右手でハーシエルを掴み、男の首を一気に断ち切る。

意志を無くした男の体は、あっさりと俺を解放する（ありえないけど、頭弱い感じで）。

どさつと音をたてて地面に転がる。

「つつ！ひどい目にあつた…」

しかし、こいつは何でいきなり襲ってきたんだ？

山賊退治の依頼と関係あるかもしれないな。

先程男に締めあげられたコメカミをさすりながら村のはずれを目指す。

それにしてもさっきの男のチョークスリーパーは圧巻だったぜ。

どれくらい圧巻かというと、サウナで股関節を脱臼して失神している人を発見した時くらいの衝撃だぜ。

まさに、

「一見の価値あり」

だぜ。

ツアイベルが町を歩いていると、さっきの男の仲間がやって来た。

「よくも俺達の仲間をやりやがったな！」

男達は剣を抜くと一斉にツアイベルにとびかかる。

「！いい加減起きろ！ハーシエル！！」

「やれやれ、せっかく気持ち良く寝てたところなのに…」

「うるさい！」

ツアイベルは、後退し、ハーシエルに命じる。

「呼び声に答える！」

いゝいゝいゝいゝん！

剣が震え、低い金属音。

ハーシエルがツアイベルの声に反応し、剣から扇子に姿が変わる。

扇子に火の文字が浮かび上がり、喉が焼けそうな程の高温を発生させる。

村人達が息を飲むのがわかる。だが、容赦はしない。

ふっ！と短い息を吐き出し扇子を振る。

自分を中心とし、炎が巻き起こる。

「あつーい包容を」

炎が踊る。

「くれてやれ！」

場に静寂が戻る。

数十人の男たちは気を失っているだけだ、

「やれやれだぜ」

空を見上げ、誰にともなく呟く。

「これは、やっかいな依頼になりそうだな……」

体は機械で出来ていた、

血潮はオイルで、心はガラス

幾度も時代を飛び越え時代操作、

ただの一度も成功はなく、ただの一度も臆さない、

四次元ポケットの使い手は独り、押入にてネズミにびびる、

故に、その生涯に耳は無く、

だから、きつと体は機械で出来ていた。

大丈夫だよのび太くん

村の真ん中に辿り着く、数は先程とは比にならない。

「また、沸いたか」

「一掃は可能だが、力の浪費は避けたいな」

それなら、この手しかないだろ。

ツアibelはハーシエルを扇子から糸に変化させると、襲いかかっ
てきた男達を一斉に糸で切り裂いた。

あとどれくらい残ってるんだ？

ま、どれだけでも俺とハーシエルのコンビは最強だけど（・・・）

b

そこに、酒場から右腕が異常に細い義手の男が出てきた。

「随分と子分を可愛いがつてくれたじゃねえか！」

「やつと親玉登場つてか？」

「俺の名はズエピア、今度は俺様が相手をしてやるよ！」

ズエピアは義手から銃を乱射する。

「はーはあ！」

雨の用な弾丸群。

だが、しかし、焦る必要はない。

「体は機械で出来ていたー！」

細く、息を吐き出し詠唱する。

「E i M a s t e r」

ハーシエルが光り、巨大な盾へと姿を変える。

ガガガガガガガ！

全ての弾を受け止める。

「どうだ！これだけの弾丸を受けて生きていられるはずが」

体は空虚で出来ていた

爆煙に乗って聴こえる詩

「な、まさか！」

血潮は闇で心は栄光

幾年も血に塗られて恍惚

ただの一度も敗走は無く、ただの一度も理解されない

彼の者は常に一人、剣の悲壮の嘆き主」

建物の屋上から声がした。

「誰だ！！」

周辺には誰も居なくなっただと思っただが、一人残っていたのか。

「ふん、これから死に逝く者に名乗っても仕方がないのだがな」

屋根の上、真っ白な服とマントを棚引かせ、そいつはそこにいた。

「ずいぶんとデカイ口叩いてくれるじゃないか」

「ツアイベル：こいつは」

「わかってる。強がってみただけだ」
白い男が口を開く。

「さあ、はじめよう。」

世界をかけた戦いを！」

同時に屋根の上の男の姿が消える。

「なっ」

「ツアイベル！後ろだ！」

「ちいっ！」

振り向き様にハーシエルを振りぬく。

ギイン！

運が良かったとしか思えない。あと、ほんの少しでも反応が遅れていれば…。

男の剣は、確実に俺の首を跳ねていただろう。

止められた事が分かると男は、

また、消えた！

「ちいっ！」

剣を構え、神経を尖らせる。

間に合うか！？

「来るぞ！」

ギルガメッシュ

[illegible]

アラブのこせがれがネズミランドで跳ね回る。

髪型はタヌキなのに……ネズミのように生ゴミをあさる君。

なぜだ？　なぜなんだ…チャックノリスの背な毛のように優雅に、むしろ妖艶に君の頭の毛をムシるよ。

最近は抜いたすね毛を蝶の標本と共に飾っています。

寝るときも一緒だよ、僕のすね毛。

僕の嫁よりすね毛が好き。

そんな僕を嫁は好き。

僕はきっとマリモであると感じている。

この前皮膚科にいったら、医師に

「毛深すぎてかき分けないと皮膚見えないよ」と言われた。

これは毛じゃなくてコケなんだけど……。

え？
彼女はいろのかつて？

おいおい、よしておくれよミシエル。

確かに昨日のことは謝るけど、君が先に浮気したんだぜ。
そんなに膨れちゃって、可愛い子猫ちゃんだなミシエルは。
今日もミシエルとレイチエルを可愛がってやるかな。

ミシエル

ニンニン……って忍者ハットリくんか！

どうしたんだい、ミシエル。

いつもはフェミニンなのに、今の君はアンニュイな雰囲気をまき散らしているよ。

まさにアレのような雰囲気であると昨日のアイツが繰り言のように呟いていたよ。

どないしたん、ミシエ……大家さん……。

ミシエルじゃなくて大家さんだったのか、だからアレのような雰囲気とともに、例のアレのような臭いがしていたのだな。

ベッドの上では全然気がつかなかったよ、まさに灯台もと暗し、ってやつだな。

そんなに怒るなよハニー。

あ、家賃は払えないよ。

なにせ、妄想を展開するための防音室を部屋に作ったのだから。

今の我が輩なら空想具現化もできそうな気がする、魔王を倒して世界を救えそうだけ。

……何をいつているんだ、大家さん。

今の俺なら約束された勝利の剣で大家さんをヒーヒー言わせることだって出来るんだぜ。

まさにベッドの上のミシエルのようにな！

そんなに怒るなって言ってるだろハニー。

もう、50代後半なんだから血圧には注意を払いな、興奮するのは我が輩の甘い妄想の中でだけにしといた方が賢明だぜ。

じゃ、オレはこれからツアibelとしてネロ・カオスを討たねばならないのだな。

家賃なら後で空想具現化しておいてやるよ。

なにせ俺は聖杯を持っているからな！神となった我が輩にあらがう

事などできないのだ！

だから消えてくれ大家さん、不退去罪が適用されるぞ。

僕ちゃんは一刹那も早く勇者になりたいんだよ。

だってそうだろ？ このままじゃ俺は真つ暗な部屋でナメクジを体中に這わせて夜な夜な興奮する隣人の田中さんと同類だと思われてしまう。

ああ、どうすつぺかなあ…、社会にでたくねえよ。俺が悪いんじゃないんだ、社会が悪いんだ！ この世界を売ろうとしてる奴らがいるんだ！ 気付くべきだ、気付いたなら戦うべきだ。

みんな言葉様に殺られてしまえ。

世界中のアフォオはみんな殺られてしまえエエ！！！！

フオオオオオオオ！！！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9700e/>

フェイト ～真祖狩り～

2010年10月15日21時11分発行